

橋本健二氏への返答

J・ウェスターガード
渡 辺 雅 男 訳

拙著『イギリス階級論』にたいする橋本健二氏の長文の、また丁寧な書評（『橋論叢』第一一二巻第二号、一九九四年八月）を渡辺雅男教授が私のために訳してくれた英語訳で、読ませていただいた。この書評を非常にうれしく思ったのは、たんに橋本氏が評価すべき多くの点を見いだしてくださったからではなく、なによりも、氏が、同書に収録されている原講義への多くの人々のコメントにも詳細で貴重なコメントを新たに付け加えてくださったからである。氏の批評は非常に的を射たもので、返答を差し上げたいと思う。私が、「批判に答える」としないで、むしろ、「返答」としているのは、たとえ橋本氏のコメントが批判的なかたちをとって行われている場合でも、それは、私たちのあいだの意見の不一致よりも、むしろはるかに多くの意見の一致点を反映していると思えるからである。この共通基盤を明確にすることが私の主目的である。以下、橋本氏が論じられた四つの点を順次取り上げていこう。

(1) 橋本氏は、非教条的な自称マルクス主義者である私が、

さまざまな非マルクス主義的なカテゴリーを使って、マルクス主義的な結論を導き出そうとしている点を気にされている。氏も認めてくださっているように、私がそうしているのは、マルクス主義理論にぴったり合うような条件の情報が通常入手できないからであり、また、そうした状況下では、マルクス主義的関心に少しでも沿うような情報なら、最大限実際的に利用するのも、意味があるからである。だが、それでも、氏は、それによって、私が経済的不平等と政治的分裂の原動力である階級的分断のインパクトを過小評価したり、また、社会的な紛争や変化を理解するうえでマルクス主義理論が有する十分な潜在的力を無意識のうちに誤認したりする危険性はないかと心配されている。

そうした危険性を否定することはできない。だが、第一の点にかんじていえば、講義で私に課せられた二つの限定をここで強調しておきたい。一つ目の限定は、橋本氏が慎重に認めておられるように、たとえば、財産所有、所得分配、政党支持などに係わるデータ、また、とくにそれらのパターンの時代的趨勢に係わるようなデータは、マルクス主義的要求を完全に満たすにはほど遠いようなかたちでしか、一般には提供されていないという事情である。だが、それらは、橋本氏が考えておられる以上に、マルクス主義的必要を満たすうえで適切なものである。たとえば、利益を生むような財産所有は、マルクス主義理論にとって、まさに直接の関心事である。財産分布のパターンデータがそうした所有のよりいっそうの集中（より少数の人々への集中）であり、そしてまた、「匿名」の事業会社や金融機関への

集中である)を示しているとするなら、このことは、マルクス主義理論にたいして、直接的な関連をもっている。それは、資本権力に固有の現れであって、それ以外のものではない。さらに、所得分配にかんする職業階層別のデータがビジネス界のトップ経営者にたいしては大きな利益を、労働市場でますます無防備の状態に追い込まれる労働者にたいしてはわずかな利益あるいは損失をさえもたらしめていることを示しているとするなら、このことは、ビジネス界の影響力が強まっていること、そして、無規制な市場の動きに労働がますます強く従属させられていることを示すかすかな兆候などではなく、直接的な証拠である。さらにまた、イギリス国民の投票行動や政治的意見についての情報が提供されるときに通常用いられる職業別カテゴリーは、「常識的」とか「ウェーバー主義的」とか言われるかもしれないし、また、実際にはそれをもってしては資本の受益者やその最高管理者をそれ以外の人々から区別することはできないのではあるが、それでもこうしたカテゴリー区分は、「マルクス主義」的なカテゴリー区分と大いに重なり合うのであってその生活をさまざまな形で労働市場の影響力に委ねる圧倒的多数の人々のあいだでの、イデオロギー的、または半イデオロギー的な分断状況を示す豊かな指標となるはずである。

講義にさいして私が念頭に置いていたもうひとつの限定は、講義の最大の関心が「階級は解消している」という目下流行の議論を反駁することであって、経済的権力とその結果的な不平等の問題として、イギリスの階級は近年強化されていることを論証することであつたという事情である。この強化された階級

構造を詳細に描くという、より大きな課題についても、そこで取り扱うことはできなかった。だが、より限定された目的にとつては、十分位とか五分位とかで表わされた所得分布データは、たとえ「階級」的なカテゴリー区分を欠いている場合であっても、ひとつの留保条件をつけたうえで、完全に適切なものであると私は考えている。留保条件とは、私がある場合、以下のことを論証できるということである。つまり、こうしたデータが全般的な所得不平等の拡大を顕著に示している場合、その不平等の拡大が、階級とは概念的にも無関係な変化から発生したのではなく、言い換えれば、世帯構成の変化や人口の年齢構成の変化から発生したのではなく、性的不平等や人種の不平等そのものから発生したのではなく、まさに資本権力や市場という、現代マルクス主義理論でいう階級的影響力の新たな強化から発生したことを論証できるかということである。拡大する分配的不平等のこうした「階級的因果連鎖」こそ、私の分析がもたら向かった対象であった。金持ちと貧乏人とがますます乖離しているとか、両者が分析目的にとつての二大階級であるとか、そんなことを言うことが私の意図ではなかった。むしろ、私が意図したのは、以下のことである。つまり、金持ちと貧乏人とが乖離していくのは、新たな経済的、政治的な施策が依然としてこれまで以上の鋭さをもって資本主義の「古典的」な階級的影響力を強化しているからである。もし、私のデータが、この影響力の鋭さをそれでも過小評価しているというなら、それはそれでしかたのないことである。だが、現実的な範囲で、私の主目的は、この影響力がソフトになったとか、あるいは薄

れかけてさえているとか主張する流行の考え方を論駁することにあつた。そして、この目的のためには、私が提示したデータは、間接的ではなく、直接的な意味で適切だったのである。

(2) 橋本氏は、「即自的」階級と「対自的」階級の区別にかんする私の議論を見て、私のアプローチが紛争と変化にたいしてもっているマルクス主義理論の可能性を十分生かしていることができないのではないかと心配している。もし両者の照応関係を否定すれば、マルクス主義理論の、したがって、事実上、マルクス主義社会学の全体系をその核心において否定することになると氏は書いている。「この照応関係を否定する」ことは、私の意図ではまったくない。むしろ、私の意図は二重である。第一に、私はつぎのことを強調したのである。この二つの概念を区別することで、マルクス主義理論は、それ以外のいかなる階級論的アプローチにもまして明瞭に、論理的であるとともに生産的でもあるような、一連の分析手続きを提起しているのである。変化をもたらす社会的政治的な緊張や圧力を問題にしようと思うなら、そのままに、経済権力やその結果としての不平等の領域をはっきりと擱んでおかなくてはならない。なぜなら、変化は、この領域から発生することが多いからである。しかし、第二に、つぎのように言うことも、私の意図である。変化のためのこうした緊張や圧力は、マルクスが予想したような、とくに彼が労働者階級の力による社会主義への移行は資本主義の歴史的運命であると宣言したときのような、画一的な性質のものでなければ、一律の方向に向かうものでもない。

私の主張は、そのどちらにおいても、二つの概念の照応関係を否定したりしてはいない。私は、第一の主張のなかで、事実両者の強固な照応関係が階級分析にとっての中心的な仮説であることを述べている。社会的緊張、政治的紛争、そして社会的変化というものは、まずなによりも、その高い可能性の根拠として、利害の経済的な階級分裂から検討を始めるなければならない。そして、そうした検討こそが歴史にたいする強力な説明手段であることが検証されてきているのである。ここにおいて、私は、「予言」よりも「仮説」を語っているのであり、また、何が「必然的」であるかよりも何が「蓋然的」であるかを語っているものであり、そう語ることで教条的なマルクス主義理論と袂を分かつているのである。私の第二の主張は、もっと劇的なかたちで、教条的マルクス主義から離れている。だが、そう言えるのは、まさに、究極の社会主義革命というマルクス自身の「仮説」ないし「予言」が、これまでのところ誤っていたことが十分実証されているからであり、また、長期的にみても、可能性のないことが十分論証可能だからでもある。資本主義的経済権力にたいする階級的な政治反応のパターンや趨勢といったものは、非常に複雑であり、非常に可変的であり、革命的な潜在的可能性を指し示すような次元までに到達していない。だから、それらをもって、「即自的階級」から「対自的階級」への照応関係を定式化することなど、とてもできない。もしも、社会主義革命へ向けたならかの定式化がマルクス主義理論の「核心」だとするなら、それは、理論というものを犠牲にすることになる。だが、もしマルクス主義の階級分析の本質が、む

しろ「即自的階級」から「対自的階級」へと向かうさまざまな照応関係を検討することに置かれているのだと考えるなら、犠牲にされるのはドグマだけであって、事実上立脚し、なおかつマルクス主義に導かれた研究にとって、それは良いことである。

(3) 階級や性別や人種による不平等の相対的重要性については、いささか手短かすぎたことで、誤解を招いたのかもしれない。というのも、私の、当初の講義における初発の問題関心は、最近における不平等の拡大は階級とは概念的にも無関係な不平等(性別や人種による不平等、ならびに年齢やライフ・ステージといった人口学的な要因による不平等)から発生しているのであって、資本権力や市場の影響力によって直接もたらされた階級的不平等から発生しているのではないという見解だけを相手にしていた。そして、この問題の叙述を後続のコメントのなかで練り直したときも、私は、ある特定の質問に対応するかたちでそうしたのであって、そうしたことが、私の一般的見解を不明瞭なままにしてしまった事情かもしれない。この点については、いま私は謝らなければならない。

実際、性別と人種による不平等が階級的不平等に還元されるかたちで説明されるのかどうかという問題について、私は「マルクス主義とウェーバー主義との間の微妙な稜線を行く」というような意味での……「訳者」「中道的」な立場を取ったわけではない。私はそのような考えを完全に拒否する(ここでも、私は「教条的」マルクス主義のもうひとつの特徴である、普遍的な説明原理であるという主張を犠牲にしているのである)。

だが、それと同時に私が言いたかったのは、階級の不平等と、性別や人種の不平等とのあいだには非対称的な関係があること、現実には(少なくとも現代の社会においては)、女性、エスニック・マイノリティーといった人々の相対的に従属的な立場は、かなりの程度まで、経済権力と仕事のネットワークのなかでの相対的に低い地位や、仕事に採用される際の制限といったかたちで表現されていること、そうしたかたちこそ、「階級」というものの内実を構成すること、これである。私としては、「かなりの程度まで」という言葉を(それ以上ではないが)強調しておかなければならない。というのは、私は、女性が、また、たとえば、黒い肌、褐色の肌の人々が、ただたんに、経済権力を、社会的機会を、そして、それと関連する「階級的財貨」を奪われていると言っているのではない。これらの人々は、根本的な意味で、人間としての地位と尊厳もまた、奪われているのである。これら地位や尊厳を奪われているということこそ、階級の影響力に還元させるかたちでは述べることができない問題なのである。ちなみに、私は、すべての女性が経済構造のなかで等しく低い地位に置かれているとか、あるいは、一律に男性より下であるとか、言っているのではない。西欧社会における黒人やアジア人が階級的に低い地位に画的に集まっているなどと言っているのではない。現実には、女性のなかでも、黒人やアジア人のなかでも、さらにまた、白人のなかでも、さまざまな階級的な多様性が見られるのである。だが、傾向としては、程度の差こそあれ、まさに彼らが人間としての完全な地位と尊厳から排除されていることの当然の結果として、終始一貫、彼

らが貧乏くじを引ていることに、変わりはないのである。

私の議論が語ろうとしているのは、現実には、多くの場合、といつても完全にということではないが、性別と人種の不平等は、階級の不平等という、目に見えるかたちをとって表現されるということである。性や人種の不平等は、階級という経済構造（資本主義経済の権力関係や市場活動のなかでの階級的経済構造）を通じて「実現」され、また、「媒介」されているのであり、その現実のままに、性や人種の不平等が階級の不平等を「超越」したなどと考えることがいかにナンセンスであるかを十二分に示しているといえよう。講義のなかで私が経験的に示そうとしたことではあるが、性や人種の不平等は、それ独自の不平等を階級的不平等に付け加えるのであって、階級的不平等に對立するわけでも、その重要性を低下させるわけでもない。

(4) 日本における階級と階級研究についての橋本氏の刺激的なコメントについては、私としても知識が限られているため、きわめて簡単にしか返答できない。ただ、第一に言いたいのは、氏がこの文脈のなかで行った、社会移動の「相対的」尺度と「絶対的」尺度の区別について、私はそれを全面的に受け入れているということである。日本における相対的な社会移動のパターンは、みなさんの国がまれに見る「開かれた社会」であるなどという神話を覆すに足る十分な証拠であるとはいえ、ここ最近までの絶対的な社会移動率は、農村経済から都市経済へとこのことと、それに關係する、兼業化のなかで促進された「階

級横断的」家族の存続という特徴とは、日本の政治における長期的な保守支配を説明するうえで大きな役割を演じるかもしれない。都市の労働者階級が農民であった過去との代代的なつながりを失い、ますます「自己充足化」（イギリス労働者階級の内部構成の歴史的傾向を説明するために、ジョン・ゴールドソープが創り出した用語）するにつれ、この保守基盤が弱まっていくのではないかという示唆は、興味をそそられる。第二の点として私が確実に理解しているのは、このことと、その他の理由からして、「終身雇用」の会社従業員を個々の会社や現在の社会体制に決定的に組み込まれた、なにか画一的なグループとしてとらえることは、経済的な説明としても間違いであり、政治的な予測としても疑わしいということである。先の問題にまた戻ることになるが、「即目的」階級（現実にあるがままの階級）と「対目的」階級との照応関係が、研究すべき対象として、ここにも確かなかたちで存在しているのであり、橋本氏の言及から理解されるように、日本における一般の社会研究者のほとんどが考えている以上の、しっかりとした照応関係の可能性が残されているのである。そして最後、第三の点として、橋本氏と私は以下の点でも一致しているようである。つまり、こうした照応関係の本質は、柔軟なマルクス主義によって導かれた立場からする、実りある研究にとっては、研究対象にふさわしいのであって、かつて、無味乾燥で無批判な常識に代わる、そのたんなる代替物としての教条的な正統派マルクス主義が対象にしていた以上に、研究対象としてふさわしいことが確かだということである。

最初にも述べたように、橋本氏と私は、あれこれの細かい点での意見の違いはあるが、それ以上に、共通の基盤を共有しているのであって、この共通基盤を明らかにすることに価値があ

る。以上を述べて、この返答を締めくくらせていただきたい。

一九九四年一〇月、シェフィールドにて

(シェフィールド大学名誉教授)

(一橋大学教授)